バルザックとカトリック教

Balzac et sa religion catholique

佐野　栄一

バルザックがキリスト教の神を信じていたか否か、定かな確証はない。残された資料を見る限り、彼が教会に通っていた痕跡はなく、また、彼の小説や書簡を読む限り、神を畏れ自らの行動を聖書の教えにしたがって律しようとした形跡もうかがえない。ただ、バルザックが、一八四二年ハンスカ夫人（1）宛の手紙の中で、自らの信仰について次のようにしたためている事実は、広くバルザック研究者に知られている。

「さて、あなたのお手紙にあった重大な質問にお答えします。政治的には、わたしはカトリック教徒です。ボスュエやボナルドと同じ立場で、けっしてその立場から離れることはないでしょう。神の前では、わたしは神秘派教会の聖ヨハネの宗教の立場です。この宗教だけが真の教義を保っているからです。これがわたしの心底です。」（2）（強調は、原文による）

ハンスカ夫人がバルザックにどのような質問を寄せたのか、バルザックの書簡のみが残されているために、詳らかにすることはかなわない。しかし、それはおそらく、一八三二年から三五年にかけて執筆し、三五年十二月『神秘の書』と題されて出版にいたった『ルイ・ランベールの知の物語』および『セラフィタ』によって（3）、バルザックがカトリックの検閲聖省から異端宣告を受けたことと関連しているだろう（4）。ハンスカ夫人は、教会の説く教義を平凡に奉じるありきたりの敬虔なカトリック教徒である。バルザックの作品の異端宣告は、夫人にとって衝撃であったに違いない。ことに、この二つの作品は、仮にバルザックに宗教と呼ぶべきものが存在したとするならば、彼の宗教思想の根幹が表明されている特異で重要な小説であり、内容に対する強い自負を、しばしば夫人に語っているものなのである。一八三四年五月十日付けの手紙では、二つの作品を『セザール・ビロトー』とともに、「人には理解されない、高邁な思想の作品」（5）であると述べ、一八三五年三月十一日付の手紙では、「『セラフィタ』、そこには衝撃があることでしょう。わたしはパリっ子の冷笑を受けるかもしれ

ませんが、すべての特権的な人の心には感動を与えるはずです。（・・・）『ゴリオ』は毎日でも書けますが、『セラフィタ』は一生で一度しか書くことができないのです。」（6）と記している。さらにもう一つ、夫人の心理に大きな動揺を与えた理由を付け足すならば、バルザックはこの兄弟作品のうちの『セラフィタ』を、構想段階から夫人に語り、作品の半分ほどをジュネーヴ滞在中の夫人のかたわらで執筆し、作品が完成すると夫人に献呈している。彼女にはローマ法王庁の決定とその原因となった彼の宗教的姿勢に重大な関心があったはずである。

ハンスカ夫人がバルザックの宗教に何らかの疑念を抱いたのは、この「質問」よりもかなり早い段階からではないかと思われる。というのも、一八三六年六月末の夫人宛の手紙に、バルザックは、「あなたの信仰もわたしの信仰も行き着くところは同じです」としたため、「これを書いているときには多分お手許にある『谷間のゆり』は、オーソドックスな形をとったもう一つの『セラフィタ』です」（7）と書いているからである。おそらく、バルザックはハンスカ夫人を安心させようとしている。であるとすれば、こうした経緯があったのち、バルザックの作品に対する異端宣告があり、それを受けて夫人があえて質問を発したと考えれば、その質問は、かなり真摯な性格を帯びたものとなるはずである。また、もしそういう経緯をたどったものではなかったとしても、「宗教的問題については、もう心配しないでください。あなたはいらざる悲しみを誤って作ってらっしゃいます」（8）との言葉が冒頭の引用に続いて見えることから、バルザックとしては、そこで真直に事実を述べていることを夫人に了解させ、大筋において二人の宗教に相違はないと理解してもらうことで煩雑な論議を切り捨て、この問題にけりをつけようとしていると考えていいだろう。いずれにしろ、四十二年七月十二日付のバルザックの手紙は、夫人の「重大な質問」に対する、彼の、重大な返答、であったことはまちがいない。

「政治的には、わたしはカトリック教徒です」。このバルザックの言葉は、きわめて柔らかい物言いではある。

しかし、要は、彼がハンスカ夫人と同じカトリックの神を信じてはいないと述べているに等しい。彼がここで述べている「唯一真の教義を伝える」「神秘派教会の聖ヨハネの宗教」とはどういうものなのか、カトリック教とどれほど隔たりがあるのか、その教義のどこに特色がありバルザックがどう共感しているのか、不意にその名が引っぱり出されているだけで、これまでもこれ以後も具体的に何の言及もない以上、彼の信仰の本当の性格については、『人間喜劇』の中に読める以外、実は何も明らかにされていない。もっとも、すべての存在の根源に神と共にあった「言葉」を据えるヨハネの福音書を、特に教義として重視する何らかのキリスト教思想は、バルザックの哲学と最も通じるところがあると思われ、その点で注目を引きはする。しかし、今日、篤学な研究者の様々な論考によって、たとえば、バルザックが「信奉する」としてしばしばその名を挙げるスウェーデンボルグもサン・マルタンも、彼の勝手な解釈に基づく彼のスウェーデンボルグであり彼のサン・マルタンであることが明らかになっている例を見れば、われわれはここでの言葉の謎を探求するより、『人間喜劇』の中に彼の宗教の真実を読むべきだろうと思う。ともあれ、「神の前では、わたしは神秘派教会の聖ヨハネの宗教の立場です」という言葉の意味は正確には把握し得ず、「神秘派教会」を追求する意味も疑わしく思われるのである。ただ、バルザックが、さきに「政治的には、わたしはカトリック教徒です」と述べたことの衝撃を緩和するため、続けて「わたしの企てた著作が、どれほど深くカトリック的で君主制的であるか、ほどなく人々に分かることでしょう」（8）と語る彼の心理はよく理解しうる。あけすけな言い方をすれば、バルザックはここで、夫人に対する言い訳を述べていると言えるだろう。つまり、バルザックは、カトリックの神を信じてはいないが、カトリックの精神を深く尊重し、その制度を信奉し、誰よりカトリックに味方する者だと言わんとしている。そう言うことで、彼はたくみに夫人の不安を払拭しようとしている。にもかかわらず、おそらく、ここには一言の虚言も弄されてはいないだろう。というのも、それは、カトリシスムに対するバルザックの本質的立場を表わしているものだからである。

バルザックが信仰に対してどのような考えを持っているのか、彼にとってカトリック教とは、またカトリックの神とは何なのか、それを探るために、まず、『田舎医者』のベナシスの物語を考えてみたい。

ベナシスの信仰の目覚めは、深い悔恨と絶望にあった。ベナシスはパリの医学生時代に、アガトという娘と知り合い、恋に落ち、彼女に家を捨てる決心をさせて同棲生活を始めた。激しい恋の末に手に入れた平和な二人の生活ではあったが、情熱が収まると、ベナシスにはそれが物足りないように思われはじめた。そうしたおり、父が亡くなりかなりの遺産を相続した彼は、アガトとのつつましい生活がうとましくなり、あえてアガトを棄てパリの社交生活に飛び込んだ。しかし、虚飾に満ちた放縦で浅薄な生活にどっぷり浸ってみると、彼には徐々にアガトの持っていた愛の価値が見直され、同時に平穏で坦々とした愛の生活が懐かしく思われはじめてきた。ベナシスの心にふたたびアガトへの愛が戻りはじめたのだった。

そうしたとき、彼は不意にアガトから一通の手紙を受け取った。それは病床にあって余命いくばくもなくなった彼女が、二人の間にできた子の認知を求め、彼にその子の未来を託そうとするものだった。この手紙を読んで、ベナシスは激しい衝撃を受けた。彼ははじめて、彼女が自分の子を生み、育てていたことを知るとともに、この間に彼女がどれほどの辛い苦しみに耐えてきたかを理解した。彼の中に、忽然とアガトへの激しい愛が蘇り、痛烈な悔恨が心を締め付けた。けれども、すべては遅く、アガトは、彼の帰還を喜びつつ、その胸に抱かれて息を引き取ったのだった。

こうして、アガトを失って、ベナシスは人生に対する目を開かれた。彼は社交界から完全に身を引き、残された子の養育に没頭した。しかし、子供がやがて成長してくると、ベナシスには、真に心を分かつ相手の誰もない寂しさがわきあがってくるのだった。二人目の女性エブリナと出会ったのはそうしたときだった

エブリナは厳格なジャンセニストの家庭に育った娘だった。まもなく似かよった性格をもつ二人は互いに惹かれ合うようになり、ベナシスはこんどこそ充実した平和な愛の生活を築こうと、彼女に求婚する決意をした。だが、その際、申し出を仲介してくれた亡き父の友人は、彼の結婚の成功をおもんぱかって、彼に子供のいることを相手方にあえて話さず、彼にも適当な時期が来るまで伏せておくように忠告した。そのため、ベナシスは、彼女の両親の招待を受けて一家の館に滞在することになったおり、ひそかに子供を家庭教師に預けざるをえなかった。ところが折悪しく、彼の滞在中に、その子が急病にみまわれ、彼はあわてて館を後にせねばならなくなった。このベナシスの突然の帰京を、エブリナの両親は不可解に思った。そのため、彼らはパリの知人にベナシスの調査を依頼することになり、彼の秘密は、不幸にも、かつて社交界でアガトとのいきさつを知ったある人物から両親に伝わることになった。エブリナの父はその過去を聞いて強く憤慨し、彼との一切の交際を即時に一方的に断絶した。

こうして、ベナシスはようやくつかみかけた幸福を失い、深い失意に陥った。しかし、まもなく彼の失意を底なしにする第二の不幸が襲来した。ただ一人残された愛の対象である自分とアガトの子が死を迎えたのだった。

この試練は、ベナシスにとってあまりに過酷だった。彼は人生の意味を見失い、生きる意欲を喪失して、自殺を思い、その是非を探るために哲学書や聖書を読み直した。その中で彼は、不意に、キリスト教の精神に深く触れ、神に帰依し孤独の中で祈りを捧げる生活の意味を見出した。ベナシスは一切を捨てて修道生活に入る決心をし、人里離れたグランド・シャルトルーズ修道院へ向かった。そして、案内された個室の壁に「逃れよ、隠れよ、黙せよ」と刻まれているのを見出すと、激しい共感に襲われたのだった。（１０）

以上がベナシスが宗教生活に入るまでの経緯である。ベナシスには三重の重い悔恨が胸に重くのしかかっていた。一つは、自分にとって最も大事な人であったアガトを、その真価も分からずに自分の身勝手から棄て、死な

せてしまったこと、二つ目は、幸福の実現を願うあまりの優柔不断さから、結果的に隠し事を作り、うまく運ぶはずの結婚を台無しにしたばかりか、愛する女性とその両親を裏切る結果になったこと、三つ目は、たとえひとときであろうと、子供の幸福よりも自分の幸福を優先させ、ひそかに人に預けたために、偶然の結果とはいえ、子供を死に至らしめてしまったこと、である。ベナシスの犯した過ちは、どれも情状の余地のある、人倫を著しく逸脱したものではなかったが、彼がその過ちによって失ったものは二度と取り返しのつかないあまりに大切なものばかりであった。彼は、たしかに人並みに利己的な人間であったが、その利己主義の報いとして得たものは、生きる意気を阻喪させるほどのきわめて大きな悲しみと孤独だったのである。それが宗教への道を彼に開いたのだった。

ベナシスが修道院に到りついて神に帰依しようとしたとき、彼は、その孤独を自らに与えられた試練としてこの神の膝元で受け入れ、ひたすら己と向き合いかつ己を滅して祈ることで、自分が背負った罪障の滅却を図ろうとした。それがベナシスにとって「逃れよ、隠れよ、黙せよ」ということの意味だった。またそれと同時に、ベナシスにとって、ここでひたすら祈りをささげることが、自分の過失から失われてしまったものへのただひとつの報いる途であり、自分が神に生かされて生きる理由である、と思えたのだった。しかし、ベナシスは僧院の修道士たちと祈りをともにしたとき、不意に、その祈りが、自分のためのものでしかない利己的な祈りであるように思われた。修道生活は、一種の高邁な利己主義であり、長い時間をかけた自殺にすぎないように思われたのだった。彼は、自分を訪ねてきたジュネスタス大尉を相手に次のように語っている。

「樅の板をはりめぐらしたその個室、その粗末な寝台、その隠遁生活。そのすべてがわたしの魂にぴったりでした。シャルトルー会の修道士たちは礼拝堂にいましたので、わたしもそこへ行って、彼らといっしょに祈りました。ところが、そこでわたしの決心もかき消えてしまいました。いや、大尉どの、べつにカトリック教会を批判

しようというつもりはなく、わたしはれっきとした正統派で、教会の事業や戒律の意義を信じています。しかし、世間から忘れられ、世間的にすでに死んだも同然のあの老人たちが、歌うようにお祈りを唱えるのを聞いたとき、わたしはこの僧侶の奥に、一種の崇高な利己主義とでもいうべきものがひそんでいるのをみとめたのです。この隠遁生活は本人にしか益せず、いわば長い時間をかけた自殺にすぎないのです。」（１１）

こうして、ベナシスはグランド・シャルトルーズから出る。そして、そこに来る途中に見た文明の恩恵にまったく浴していない貧しい寒村の医師となることを決心し、全精力を注いで村民の福祉と村の発展のために身を捧げる。ベナシスは利己的だったことによって最も大事なものを失い、失うことよってその愛のなんたるかを知った。彼の悔恨のいたましさは、愛を知り愛が心にあふれるようになったときには、それを注ぎうる対象を失って孤独となり、さらにその孤独から再び愛する対象を得て逃れ出ようとしたとき、またしても自分の過失から、根こそぎすべてを喪失して完全な孤独と絶望に陥ったことにある。だから、彼が、自己の救済の手段として、社会をその相手に求め、辛苦に満ちた生活を営む人々に愛を返すことに残りの人生を使おうと決意したことは、ごく自然の成り行きだろう。ベナシスのけっして癒えることのない悔恨の傷口からは、愛が、むなしく、血液のように流れ続けているからである。しかし、ベナシスと神との対話は、グランド・シャルトルーズの僧院から出るとともに消える。バルザックは、ベナシスの罪障を、神に帰依し神にすがることによってではなく、社会に貢献することで湮滅させようとするからである。それより他に、彼の魂の救済はありえないからである。

つづいて、やはり宗教が重要な役割を果たしていると見られるもうひとつの大きな作品『村の司祭』について考えてみたい。

『村の司祭』の主人公ヴェロニックは、人知れず巨万の富を蓄えた屑鉄古物商ソーヴィア夫妻の一人娘として生まれ、父が婿に選んだ銀行家グラランと結婚した。この結婚は、はた目から見れば何不自由ない幸福な生活のスタートであったが、ヴェロニックは、まもなく夫との暮らしが苦役以外のなにものでもないことを知った。グラランは有能な銀行家であり、別段特異な性格でもなかったが、彼女の感情と肉体は夫を嫌悪し、理性に反して、どうしても夫を受け入れることができないからだった。

ヴェロニックは、結婚を喜ぶ両親を愛し、また平凡な道徳観の持ちぬしとして、この状態を克服しようとあがいた。だが、彼女の気持は自らの意志にしたがわず、長くつらい葛藤を続けた末、彼女はその救いを読書と宗教に求め始めた。ヴェロニックはさまざまな文学を読んで想像の世界に喜びを見出そうとした。また、熱心に教会の定めた務めを果たし、慈善活動に精力を注いで、抑圧された精神の喜びを聖書が命ずる義務を果たすことで満たそうとした。だが、抑圧されていたのはその精神だけではなかった。読書でも宗教でも充足し得ない自然の鬱屈したエネルギーが、徐々に彼女の中で臨界に達しようとしていたのだった。

それにもかかわらず、その後しばらくして、ヴェロニックは光輝くように美しくなった。彼女は、まもなく妊娠し、やがて大きなお腹を抱えるに至った。ところが、不思議なことに、彼女の輝きは臨月に達するころ突然失われ、出産と同時に彼女は、それまでとは対照的な、鬱々とした長い病の床に臥すことになった。

そのころ、村では、ある凶悪な殺人事件の裁判が結審にいたっていた。事件は、タシュロンという若く貧しい陶器工が、守銭奴の老農夫が隠した金貨を盗み出そうとして気づかれ、口封じにその農夫と悲鳴を聞いて家から出てきた女中を殺害したというものであった。一見、この事件は、単なる極悪非道な強盗殺人によるものと見えたが、いくつか不可解な点があった。一つはタシュロンがとうてい犯罪を犯すとは思えない誠実な青年であったこと、二つ目は、その彼が、発見されても逃亡に及ばず、決然と殺人を犯していること、三つ目は、事件には共犯者がいると思われるが、彼はその証拠を現場で隠滅し、それについて頑強に口を閉ざしていることであった。

何のためにタシュロンが金を必要とし、誰を庇っているのか、まったく謎のまま、彼の死刑が確定し、刑が執行に移された。人々は明かされないこの謎をさまざまに取りざたした。

そうした騒ぎがようやく収まったこの年の暮れ、ヴェロニックはかろうじて起き上がれる程度まで回復した。彼女は、たまたまモンテニャックの土地と城館が売りに出されたのを聞くと、夫に結婚契約にしたがって自分の持参金をその領地に換えてくれるように求めた。グラランは、その不動産の資産価値を確かめるため、モンテニャックの司祭ボネを自邸に招いて話を聞くと、安んじて妻の求めに応じる決断をし、その土地を買い取って妻に与えた。

それからまもなくして、パリには七月革命が勃発し、金融恐慌に巻き込まれたグラランの銀行は破産に追い込まれた。グラランはそのため極度の心痛におそわれ、絶望のあまりあえなく世を去った。残されたヴェロニックは、銀行の清算を果たすため、一家の友人である老銀行家グロステットを頼り、彼の尽力によって、彼女の手許にはすべての債務の償還が果された上に若干の財産が残された。彼女はそれを持って自分の領地であるモンテニャックに行き、新しい生活をする決心をした。こうして、ヴェロニックはモンテニャックの城館に移り住んだのだった。

彼女は、村に落ち着くと、まもなく司祭ボネの導きで大規模な慈善活動を始めた。ことに彼女は村の近代化のために私財を惜しまず投入し、巨額の費用を必要とするダムの建設と潅漑工事を行った。そのおかげで、広い荒地が緑の沃野に変わり、モンテニャックは村人も土地の持ち主である彼女自身も共に豊かになった。

にもかかわらず、ヴェロニックの顔に明るい喜びの色が浮かぶことはなかった。むしろ逆に、顔には憂いが見え、そのころから彼女の健康は急速に衰えていった。

ヴェロニックは、授乳が終わったのち十三年間にわたって、ひそかに苦行帯を着けていた。しかも、その間、彼女は誰とも食事を共にしたことがなく、いつも自室で何の味付けもしない野菜とパンだけを食べていた。この

ようなわが身を虐げる行為の理由は何なのか、それはタシュロンの事件と関係していた。

タシュロンは、モンテニャックで生まれ育ち、おそらく慈善活動をしていた彼女と出会うと、瞬く間に宿命的な激しい恋に落ちたのだった。そのため、彼は彼女と出奔する資金を得るため盗みを働き、発見されてその存在が露見するのを防ぐため殺人を犯し、捕縛されてあくまで彼女をかばうため自供を拒んだ。

ヴェロニックは、愛する男を思いがけず凶悪犯罪に走らせ、死にいたらしめてしまった。一人安全なところに残された彼女の悲しみと苦悩と悔恨とは、失われた情熱の大きささだけ深かった。それゆえ、ヴェロニックにとって、己を責め、己を虐げながら、持てるものすべてをかけて社会全体に償いをすることが、むしろ心の救いとなった。

ところが、その贖罪が彼女に新たな苦悩を産み出していた。というのも、ヴェロニックがこの世でただ一人愛した男は、城館から見下ろせる教会の墓地で、今なお殺人犯として、人々の非難と軽蔑を受けていた。それに対して、彼女は、罪の負債を返す行為が人々の目には秀でた美徳のしるしと映り、誰にも言えない苦悩を抱えていることが魂の崇高さと映って、いたるところで厚い尊敬と賞賛を受けていた。それが、彼女の心を深く傷つけ、心から血を流させていたのだった。

ヴェロニックは、いっそう衰弱してこの世との別れを間近に予感したある日、あえて人々のいる前で自分の唯一の安らぎの場所として眼下のタシュロンの墓を指さした。その意味は結局ボネにしか分らなかったとはいえ、彼女はもはや自分の罪を告白することに何の躊躇も持っていなかった。彼女は自分の虚像を剥ぎ取ることで自分の魂を救うと同時に、タシュロン家の人々に償いをしたかった。それゆえ、ヴェロニックはリモージュから大司教が彼女の衰弱を聞いて最後の別れにやって来ると、ボネと彼に向かって、下の墓に眠るタシュロンの大罪に大きな役割を果たしたのは自分であり、逆に自分の善行に大きな役割を果たしているのは彼であることを懺悔した。その上で、いまや自分の安らかな死を阻んでいるのはこの秘密だけであり、その障害を取り除くために公開懺悔

することを許してくれるよう嘆願した。それを聞いた大司教は、教会の原則に反する彼女の希望を拒み翻意を命じたが、ボネのほうは、その願いがヴェロニックの浄化された心から発していることを指摘して、望みを叶えることに賛意を表した。そのため、大司教は、長い間の沈思のすえ、ついにそれを例外として聞き届ける決断を下した。

こうして、ヴェロニックは、臨終に立ち会うために城館に集まった数多くの人々の前で、自らの罪を告白することになった。だが、結局、彼女の声は、彼女を慕い、彼女の死を心から悲しむ多くの村人の嗚咽にかき消され、周りを取り囲んだごく親しい友人たちの耳にしか届くことはなかった。

以上が『村の司祭』におけるヴェロニックの宗教活動の始まりから終わりまでである。

ここでまず問題なのは、ヴェロニックの苦悶の半生が、果たして宗教に彩られていたといいうるか、ということである。たしかに、彼女が深い悔恨を有し、救いを希求していたことはまちがいない。しかし、ヴェロニックはそのために神にすがったのであろうか。彼女が苦行帯をつけたのは、言うまでもなくイエスの受難の苦しみを味わおうとするためではない。また、極限までの清貧に自らを置こうとしているのも、信仰の妨げでしかない諸々の肉欲物欲を滅却しようとしてのことではない。彼女は自らの運命を呪い自らを罰しているのであり、神に祈り、神に許しを乞い、その上でいつか甘んじて神の裁きを受けようとしているのではないのである。けだし、彼女の可能なただ一つの救いは、むしろ自らをけっして許そうとしないことだろう。しかも、そのように自分を審判しうるのは神ではなく、ほかでもない彼女自身なのである。

それゆえ、ヴェロニックの懺悔、つまり厳密にいえば告解は、罪の告白ではあっても、真の意味での告解ではない。告解での罪の告白は、神に自らの罪を認めて改悛の情を証し、神の許しを請うための手続きだからであり、それは結局、神の許に戻ること、つまり回心することにつながり、それによってはじめて罪を消滅へいたらしめ

る方途だからである。したがって、告解は、聖職者の仲介によって実現する懺悔する人間とそれを聞く神との対話であるといいうる。ところが、ヴェロニックの懺悔の場合は、罪の告白を神に聞いてもらおうとするのではない。タシュロンとタシュロンの事件を知るすべての人に聞いてもらおうとするものであり、彼女はそれによって誤って与えられている自分の名誉を放擲すると同時に、汚辱に浸された続けた愛人とその親族の名誉を晴らそうとするのである。彼女は、まさに、タシュロンがすべてを犠牲にして彼女を救ったように、同じだけの情熱で自らのすべてを犠牲にし、彼の名誉を回復しようとする。それは、ヴェロニックにとって、人生のすべての喜びが、人生のすべての意味が、タシュロンとの束の間の日々に凝縮していたからであり、奪われたあまりに大きな彼への情熱が、彼女に究極の自己犠牲を命じずにはおかないからである。そのとき、ヴェロニックにとって、あとに残される一人息子の名誉を守ることはもはや重要ではない。彼女は、結局、タシュロン亡きあと、母として生きてきたのではない。母である以上にはるかに女として、きわめて激しい暗転した情熱を燃え立たせる女として生きてきたのである。

ヴェロニックは、宗教がもたらしうるかもしれない心の安寧を、グラランとのつらい生活の中では求め続けた。しかし、タシュロンを知りタシュロンを奪われてからは、安寧そのものを一切拒絶している。彼女の心は平和であってはならなかった。苦しんでいなければならなかった。その悔恨には、彼との不倫を悔いる気持ちなど微塵もなく、あくまでタシュロンをただ一人極悪非道な死刑囚にいたらしめてしまったという痛切な無念があるのみである。ヴェロニックの突然途絶された情熱は、タシュロンの処刑以来けっして死滅することなく、ひたすら最後の懺悔へと連続しているのである。

それゆえ、彼女の懺悔は天を向いたものではない。地上のほうを向いている。たしかに、それは、彼女の利益に完全に反する事実の告白である限りにおいて、また自己の境遇の不正を憎み正義を貫く告白である限りにおいて、ボネの言う「清浄な心から出た」告白であろう。しかも、ボネが見たとおり、その懺悔を認めなければヴェ

ロニックの魂を救済することができない、やむを得ない情況での特別な懺悔であろう。けれども、そのことは、結局、ヴェロニックの魂が神によってはけっして救済され得ないことを意味する。彼女が行おうとする懺悔には、現世での、きわめて個人的な、しかもはっきりした目的が、つまり明らかに亡きタシュロンとタシュロン家にとって有利な功利性があるのだ。それをボネも、また躊躇のすえ大司教も是認する。であるとすれば、それはおそらくローマのカトリック教ではあるまい。バルザックのカトリック教なのである。そこには神よりも人間社会がある。神の論理よりも情熱の論理が君臨しているのである。

かくして、きわめてカトリック的に見える人物が、実際にはカトリック的ではない。バルザックの宗教の中心にあるのは何なのであろうか。真に神なのだろうか。そういう疑問を抱かずにはいられないだろう。

では逆に、『人間喜劇』の中に、カトリック的といえる人物は存在しないのか、おそらくそうではあるまい。わたしには、すぐに『無神論者のミサ』のブルジャが思い浮かぶ。彼こそ、バルザックの理想とする素朴で敬虔なカトリック教徒として描かれているように思われる。しかも、ブルジャの物語を読むと、バルザックが、「わたしの企てた著作が、どれほど深くカトリック的で君主制的であるか」、と述べる理由も理解しうるように思われる。そこで最後に、ブルジャにおけるバルザックのカトリシスムの何たるかについて考えてみたい。

ブルジャはオーヴェルニュの病院で孤児として生まれ、パリに出て水売りを生業にし、生涯、身寄りを持たず結婚もせず、孤独に貧しく死んだ。その彼に、もしただ一人家族のように思ってもいい人物がいたとすれば、それは、驚くべきことに赫々たる名声の持ち主であるパリの天才的外科医、デプランであった。デプランは、学生時代、きわめて貧しかった。彼は衣食に事欠いたばかりか、家賃も滞納し、あるときついに部屋を追い出される

窮地に陥った。そのときちょうど、もう一人部屋を追われようとしている人物がいた。それがブルジャだった。

ブルジャは水売りという賤職を生業にしていたことから根拠のない偏見を受けていた。それが彼の部屋を放逐された理由だった。ところが、実際のブルジャは善良で謙虚で親切な男であった。彼は無一文の逆境にあるデプランを見て、たちまち彼を自分と同じく「孤独で苦しんでいる人間として、受け入れ」（１２）、滞納した家賃を払ってやっただけでなく、デプランの荷物を自分の荷車に積み、いっしょに部屋を探すと、その隣に住んだ。そして、デプランが才能ある医学生だと分かると、あらゆる援助を惜しまず、彼を励まして成功へ導こうとした。デプランは、当時を思い出して、ビアンション（１３）にこう語っている。「この男は、君、わたしには使命があると、私の知能が必要とするものは自分が必要とするものに優先すると理解したのだ。」（１４）

ブルジャは出過ぎることを慎重に避けながら、「注意深い母親となり、最も心配りのこまやかな恩人となり」（１５）、「良き父とも良き下僕とも」（１６）なって彼を支え、ついには、デプランに試験を受ける資金がないと分かると、何の未練もなく長年の念願であった水売りの大樽と馬を買うための蓄えをくずして与えた。しかも、こうして、デプランが研修医になることができて、みすぼらしい下宿をあとにする日が来ても、ブルジャは自分の寂しさと悲しみを隠しながら、わが子の門出を喜ぶように、彼を世に送り出したのだった。

このようなブルジャの生き方のみなもとは何なのか、それをバルザックは、ブルジャの置かれた孤独な境遇と同時に、宗教に求める。

ブルジャは教育のない、「素朴な民衆の信仰心 la foi du charbonnier」（１７）を持つ敬虔なカトリック教徒である。彼は毎週欠かすことなく教会に通ってミサに参列し、祭壇にひざまずいて熱心に祈り、「ありがたい」司祭の説教を聴く。ことに、彼は「聖母マリアを自分の妻を愛するように愛していた」（１８）。そして、彼の心を占める大きな関心事は来世であった。ブルジャは、死後には天国と地獄があると固く信じ、病に臥すようになってからは、「たびたび、夜、来世へのおそれを漏らして、自分が十分に清い生活を営んでこなかったことを

恐れていた」（１９）。ところが、実際には、ブルジャこそ、まさに「もし天国というものがあるならば、彼が天国に入らなくて誰が入ろう」（２０）という人物なのである。

ルイ・ランベールは、天国と地獄について「民衆の目にはこれなくしては神が存在しない二つの概念」（２１）と述べている。だが、民衆にとって、来世は、恐怖であると同時に希望でもあったはずである。人は、言うまでもないが、自分の生まれを選ぶことができないし、境遇も、降りかかる運命も選ぶことはできない。それゆえ、何のゆえもなくつらい生を生きることを強いられ、それを忍ぶことに少しの価値も見出せず、自分の人生そのものが無意味と思われるとき、来世の存在はその人間に希望と映るだろう。また、それを神の試練として忍ぶことが彼岸のよき生につながるなら、つらい生を生きる勇気も与えられることになるだろう。両親に棄てられ、妻も子も友だちもなく、毎日毎日重い荷車を引いて水を売り歩くだけの苦痛に満ちたしかも人に蔑まれる肉体労働者であるブルジャにとって、現世とはいったい何であるのか。「何かに向けずにはやまない愛情で心がいっぱいにふくれていた」（２２）ブルジャは、おそらく、庇護を必要とするデプランを見出したとき、神に感謝したのだ。デプランに無償の愛を注いで、自分の人生とは比較にならない有意義な彼の才能の結実を見ること、それは、もちろん、親がわが子を育てるときに味わう喜びと同様の喜びを享受することであるが、同時に、はっきりと形に見える甲斐のある善行を積むことであり、最後の審判に臨むときの魂の貯金を自然にたくわえることでもあるからだ。ブルジャは二重の意味で、デプランの言葉を引けば、「ぼくのために、また自分のために、ぼくを愛していた」（２３）のである。

けだし、ブルジャは当時のフランスにおける純良で素朴な民衆の精華である。彼は孤独であるゆえに愛に満ち、貧しいゆえに情け深く、無教育であるために謙虚で、分を知るゆえ恨みを抱かず、己の能力の低さを知るゆえに自分の成した功績に高ぶらず、深く神をおをれるゆえに自らが為してしまった不正を心より悔やむ。ここには、バルザックの創造した最も美しい民衆像がある。それをおそらく、バルザック自身も、ひそかに自負していたこ

とだろう。

このブルジャが登場する『無神論者のミサ』は、一巻千ページをゆうに超えるバルザックの定本プレイアッド版『人間喜劇』全十二巻において、わずか二十ページにも満たない短編小説である。しかも、この小説の主人公はデプランであり、彼はビアンションとともに重要な脇役である。バルザックは重要人物を何度も自分の別の小説に再登場させ、たとえば、霧生和夫氏のコンコルダンスによれば、ラスティニャックは『人間喜劇』中に六〇七回、ビアンションは三九七回、デプランは九三回名前が出てくるという。しかし、ブルジャは一七回である。一七回という数字は、おそらく本人の物語が展開するこの小説の中以外、その名が出てこない数字と見ていいであろう。周知のように、バルザックは「戸籍簿と競争する」ほど人物を創造した。実際、登場人物のための事典をつくるとプレイヤッド版では四百ページを超える量になっている。そのものすごい数の人物を創造したバルザックにおいて、ブルジャは、物理的にはあたかも、数々の豪華料理の脇にそっと添えられた田舎パンの、上に一つまみ振りかけられた胡麻ほどの人物にすぎない。しかし、ブルジャは特別な作中人物である。バルザックは『人間喜劇の総序』において、自分が創造した徳高い人物として特に三十人ほどを列挙しているが、そこにはブルジャの名が見えている。ブルジャはとても小さいが、きらめく美しさを持った、バルザック自身にとっても大切な人物なのである。そして、細部こそ本質を表すというバルザックの小説信条に則れば、ブルジャは『人間喜劇』のある本質を表している。

十九世紀前半のフランス社会を基にバルザックが作り上げた膨大な小説群の中で、とりわけブルジャが美しい民衆の結晶として取り出され、バルザック自らそれを『人間喜劇』における貴重な財産としているとすれば、ブルジャという人物の成立条件をなすカトリック教は、バルザックの小説世界とその美学にとっても、とりわけ重要な要素だろう。ところで、『人間喜劇』の美しい人物たちを想起するとき、彼らは、多くの場合、その階級の

もっとも良質な精神を具現している人物たちであるように思われる。たとえば、『谷間のゆり』のモールソフ夫人、『ゴリオ爺さん』のボーセアン夫人、『骨董室』のシェネル、『セザール・ビロトー』のセザール・ビロトー、『ふくろう党』や『いとこベット』の大ユロ、そしてこのブルジャ、等々、彼らはその階級に特有の何らかの精神性を有し、その精神に殉じることを当然のこととして生きている。もちろん、そこには愛、名誉、忠誠、信義、高潔、廉恥、といった人間の普遍的価値や美が存在するだろう。しかし、同時にそこには、階級特有の愛、名誉、忠誠、信義、高潔、廉恥といったものが存在し、階級意識によって純化され先鋭化されてもいるのである。バルザックが『人間喜劇』の任意の人物たちの中に、こうした階級に由来する美を結晶化させるとき、おそらく、そこには、階級社会を是とし、階級社会の中にこそ理想の実現を見ようとする彼の精神が反映している。しかも、バルザックにおいては、カトリック教はそれと密接に結びついているように思われるのである。

バルザックが社会について考えるとき、そこにはつねに、人間の脳には優劣があるという事実が、まず第一の前提として存在している。彼は、人間の中には「真実」を捉えることのできる人間とそうではない凡庸な動物的人間がいる、と考え、さらに「真実」の「真実」とも言うべき大真理を超越的な抽象能力によって捉えうる天才＝特殊能力者と、そこの領域まで達することのできない単なる抽象能力に長けただけの知的人間がいると考える（２４）。それゆえ、バルザックは、自己の哲学的確信において、社会における階級成立の必然とそれを是認した上での「家族」的な秩序の必要をつねに主張するのである（２５）。というのも、知的能力の不平等は力の不平等を生み、必然的に財産の不平等を作り出すからである。ベナシスはこう語っている。

「分別のある人間ならだれしも、わが国のこの動乱の四十年（フランス革命以後の四十年―論者）を見て、きっと、優越性というものが社会秩序の必然の結果であることを悟ったろうと思います。優越性には思想上の優越、

政治上の優越、財産上の優越と三種類ありますが、いずれも異論をさしはさむ余地のないものです。これこそ芸術と権力と金銭、というか、〈原理〉と〈手段〉と〈結果〉を象徴するものではないでしょうか？ところでかりにいま、すべてが白紙に還元され、社会の構成単位がまったく平等となり、出生率も一定し、またどの家族にも同じ面積の土地を与えたとしても、短時日のうちに現在存在する財産の不平等が再び現れるでしょう。だから、結局財産と思想と権力の優越は、受け入れるより仕方のない必然だということがこの明白な真理からもはっきり結論されて来ます。」（２６）

人間の知的能力は不平等である。それゆえに、その能力の相違が社会に力の不平等とその結果としての財産の不平等を必然的に作り出す。であるとすれば、社会に階級が成立するのは人間の自然である。そのように、バルザックは見ている。ところが、人間は自分が上位にいない限りそれを是認しない。たとえば民衆というものは、「どんなに正当に獲得された権利でも特権視し」（２７）、敵意を抱くものなのである。つまり、ここにおいてバルザックにとって重大なことは、一般の人間は知的能力の相違ということが何を意味するか真に分かっていないということである。十九世紀人のバルザックは、世界の究極的真理は一つであると信じている。しかし、真理は凡庸な人間には見えない。社会を構成する多くの人間には、自分たちにとって究極的に何が大事なものであるか見えないと考えるのである。だから、彼は民主主義ではなく、少数の卓越した人間が権力の上座に就きうる階級政治、つまり現実的には王政を支持する。

しかしながら、「動乱の四十年」によって、フランスは正統王朝を二度にわたって廃し、立憲王政に移行して選挙法が成立した。バルザックの見るところ、選挙法は民主的な自由な政治を生み出しうるとしても、けっして正義の政治を生み出しはしない。むしろ、欲望にまみれた多くの凡庸な知性によって選択された政治が、無私で高潔な高い知性の選択した政治を公然と排除し、それを正義としうるのが民主主義だ、とバルザックは見るので

ある。『人間喜劇の総序』の中で、彼は次のように述べている。

「私は、立法のために優れた原理である〈選挙〉を敵視しているわけではない。だが、唯一の社会的手段であるかのように解釈された〈選挙〉、ことに今日のそれのごとく悪しく組織された〈選挙〉には、いかにしても与しがたい。というのもそれは、王政主義の政府であるなら当然その利害や思想を考慮するであろうはずの重要な少数派を代弁しないからである。〈選挙〉があらゆることに行き渡ったとしたら、われわれには一般大衆による統治が押しつけられることになろう。そしてそれこそ、一切の責任をとろうとしない統治、その圧制にいかなる拘束も加えられない統治である。なぜならそこでは、圧制が法の名で呼ばれるからである。」（傍点は原文による）（２８）

言うまでもなく、バルザックの時代、選挙は制限選挙であった。選挙法は何度か改正され、選挙権を得るための国庫納税額はそのたびに引き下げられた。そのおかげで、バルザック自身、一八三二年の選挙に立候補する望みを抱いて運動したが、実際には、彼には被選挙権も選挙権もなかった。当時、選挙を自分たちのものにしていたのは、おもに大ブルジョワとブルジョワ化した貴族たちであった。このような金の力を中心とする民主主義においては、真に優れた知性と徳を持つ人間は、けっして権力の座につくことも、その傍らにあって権力をふるうこともできない、とバルザックは見る。なぜなら、社会には百の欲深で凡庸な有権者・政治家に対して、聡明で高潔な有権者・政治家はほとんど一にも満たぬ割合しかいないからであり、特定の利益に与しない後者には、党派というものが存在しえないからである。かくして、バルザックは、選挙制はむしろ権力と権力によって獲得しうる財産への欲望を一般化することで、近代の社会をいっそう悪く変えた、と見るのである。

「われわれは、今日笑うべき封建制の代わりに、金、権力、才能という三つの貴族階級を有しているのではある

まいか。というのも、それらは、いかに合法的だろうと、民衆の上に大きな重圧を加え、銀行の特権的支配や、責任内閣制を押し付け、ジャーナリスムや論壇から弾丸を撃ち込むのであり、こうした仕組はみな才能ある者たちの出世の踏み台となっているからである。こうしてみると、立憲王政に復帰したフランスは、虚偽に満ちた政治的平等をかかげる一方で、実に悪を一般化したにすぎない。」（２９）

ここでバルザックが述べている「才能ある者たち」とは、高度の知的能力を持った者たちのことではない。自分の欲望を実現する才知を持った者たちのことである。『幻滅』の中に読むことができるように、知性は民主主義の時代に入って利用し消費するものに変わってゆく。言論は正義の闘技場ではなくなり、権力の一端を担うものとして、その影響力の多寡に応じてはっきりと言論そのものが市場価値を持つものに変わってゆく。現代、われわれは一般に、民主主義を不正な権力の濫用を防ぎうるより危険の少ない政治制度として選択しているが、当時のバルザックは、むしろ王政をそうした政治制度として選択するのである。少なくとも、人間の際限のない欲望という悪を封じるには、王政のほうがはるかに有利、と彼は考えている。そして、バルザックには、人間の知的能力の不平等を認め、その上で家族的秩序を形成する階級社会のみが、唯一、優れた人間を生かし、また凡庸な人間にはそれぞれの分にあった美しい生き方を可能にさせる制度として見えている。そのとき、宗教は、バルザックにとって最も重要な政治的役割を担ってくれるものとなる。彼はベナシスに次のように言わせている。

「権力の行使に対して修正を加えうるものは、一国民の宗教機関をおいて他にありません。宗教こそ、最高権力の濫用を阻止しうるただ一つの有効な力なのです。（・・・）宗教は、来世という思想によって、二つの利己的感情（自己保全の感情と個人的利害の感情―論者）を抑制し、それによって社会的接触のもたらす苦痛を和らげてくれます。神はこうして、自我の忘却を美徳とする宗教感情によって、利害関係の摩擦が引き起こす苦しみを

緩和したもうのです。ちょうど世界のメカニズムの摩擦を、われわれの知らない法則で調整したもうたように。キリスト教は、貧しき者には富める者を赦せ、富める者には貧しき者の悲惨を救えと命じていますが、私は、この短い言葉の中に、あらゆる神の掟、人間のつくる法律の精髄がふくまれているとさえ思うのです。」（３０）

バルザックにおいて、宗教は、政治を規定し政治の進むべき道を示すと同時に政治的秩序を支えるいわば人間社会にとっての最も重要なサポートシステムとなっている。その重要性は、実のところ、彼が神を信じるか否かとは関わりがない。肝心なのは人々が神を信じ、神によるとされるこの大切な制度を維持することなのである。バルザックにとって、宗教は、人間が社会を形成し、そこでよりよく生きるための必要事なのである。『社会要理』に、バルザックは次のように記している。

「宗教は、あらゆる悪に向かおうとする動きを抑止し、善を発展させようとする。だから、宗教は社会そのものである。それは、神の作り出した制度ではあるまい。人間の必要事であろう。」（３１）

民衆にとって、宗教の中心には神がある。しかし、バルザックにとって宗教の中心には人間がいるのである。バルザックの本来の神は、もしそれを神と言いうるなら、すべてのものの源をなし、すべてのものに行き渡っているだけの存在である（３２）。それは一種の始原論哲学の始原素であると同時に全存在に変容するプログラムそのものであり、万物の源から現実在までの関係を、あるいは霊と肉、あるいは形あるものとないもの、あるいは抽象と具象、あるいは言葉と存在、要するに人間における全実体の有機的関係を説明する根本原理をなすものであって、まったく人間道徳の問題とは関わりがない。したがって、バルザックにとって宗教の問題はあくまで神の問題ではなく、政治の問題なのであり、さらには、美学の問題ともなる。なぜなら、彼には、数千年の歴史

を持つ宗教の核に、人がよりよく生きようとしてたどり着いた賢明な精神と慈しみ深い心の結晶が、すなわち人類の英知と人類の生の美学が見えていたからである。その宗教という制度を、バルザックは、人間にとって最も大事なものとして、ただ神なしで戴こうとするだけである。それゆえ、彼がハンスカ夫人に書き送った「私の宗教もあなたの宗教も行き着くところは同じです」との言葉も、「わたしの企てた著作が、どれほど深くカトリック的で君主制的であるか、ほどなく人々に分かることでしょう」との言葉も、見方を変えれば少しも嘘を含んではいない。バルザックにおいては、政治と宗教とは一体であり、それによって彼が望むよりよき社会が成立し得る。それは、畢竟、階級社会であり、階級社会こそは、バルザックにとって、能力差のある人間の最も自然な状態であり、卓越した人間がその真価を万人のために発揮しうる必要条件であり、優れた人間も凡庸な人間も自分の尺度に合った美しい生き方が可能なただ一つの制度である。そして、カトリック教はこの制度を内側から支え、保証する欠くべからざる「必要事」なのである。このカトリック教と不可分の階級社会は、バルザックがそれを最良の制度と信ずる限りにおいて、彼の小説美学がその理想的形式を真に獲得しうる場、ということにもなるだろう。もちろん、バルザックの偉大さはその美学とは無縁かもしれない。むしろ、小説に取り込まれた現実が、しばしばその美学を解体してしまう悲劇性の中にあるのかもしれない。しかし、たしかに、その精神において、バルザックは、神ぬきの、「カトリック的で君主制的な」作家であることは間違いない。

一八三二年、バルザックが公然と正統王朝派に転向したとき、多くの人々が彼の転向を嘲笑した。一八三〇年頃から広く文壇に認められ始め、上流社交界にも招かれるようになって有頂天になったバルザックは、そこでときに俗物ぶりを露呈して哄笑の的になったが、人々は、ついにそれが高じて貴族にすり寄るに到ったかと思ったのだった。たしかに、バルザックは上流社交界の華やかな雰囲気ときらめく知性と容易にまねしえない趣味に憧れ、人一倍貴族になりたかったであろう。せめて、貴族に出自を尋ねられて顔を赤らめなくていい程度の名前と

財産がほしかったろう。自分の名前に本来存在しない貴族のしるしである「ドde」を付けたのも、バルザック家とは縁もゆかりもない名家バルザック・ダントラーグ家の紋章をまねた刻印を用い始めたのも、苦しい懐から最も安価な二輪馬車（カブリオレ）を中古で買う金をしぼり出したのも、そのあらわれである。しかし、バルザックの転向はそうした俗念からだけではなかったのである。おそらく、この頃、ようやくバルザックの基本的思想が確固としたものになったからである。つまり、バルザックの中で、自分の小説美学が求める背景として明確に階級社会が意識され、それを成立せしめる条件としてカトリシスムと正統王朝主義が欠くべからざるものとして見えてきたからなのである。

それ以後、バルザックの美学と一体になった政治思想は、熟成の時を迎える。必要に応じて、重要な登場人物の口や彼らの物語を通して、様々に展開されることになる。時に失われた貴族社会の美学が語られ、時にカトリック教の意義が強調され、また神が引用されることにもなる。しかし、そうして時折姿を現すバルザックの宗教は、神秘的であるか徹底して社会的であるかである。もしかすると、バルザックは、ローマ法王庁が問題にした『ルイ・ランベール』や『セラフィタ』の特異な哲学的、神秘主義的部分において異端である以上に、宗教の重要性をもっぱら社会的功利性の部分に置く姿勢において異端なのではないだろうか。そこには人間存在の根源的不安を抱えながら、神を畏れ神にすがり神を崇める、神と人との魂の対話が決定的に欠如しているからである。しかしながら、掛け値なしにバルザックにおいて言いうることは、たとえローマ法王庁から作品が断罪され、指弾されても、そんなことを彼は意にも介せず、なおローマカトリックの味方だろうということである。それは、彼にカトリシスムを誰より深く理解しているとの自負があるからではなく、あたかも神のように自分自身のフランス社会を抽象的次元に構築するこの作家の、想像力の核心にある美的精神が、自分の世界を支える柱の一本としてカトリック教を認め、必要としているからなのである。

〈注〉

（1）ハンスカ夫人は、ウクライナの大貴族夫人で、バルザックの愛読者。バルザックに一種のファンレターを書いたことから二人の間に文通が始まり、やがて両者の関係はエスカレートして、一八三四年バルザックはジュネーヴ滞在中の夫人を訪ね、特別な関係を結ぶ。一八四一年夫人の夫ハンスキ氏が死去すると、バルザックは猛然と彼女を口説いて、一八五〇年三月ついに結婚にまで漕ぎつける。しかし、二人の結婚生活は、八月一八日バルザックが死去したため、五ヶ月あまりでしかなかった。

（2）七月十二日付。Lettres à Madame Hanska, édition du Delta, Paris 1967, tome 2, pp.90-91.参照。

（3）『神秘の書』には、この二作品のほかに短編『追放者』が収められていた。

（4）検閲聖省 la Congrégation de l'Index は、一八四一年九月十六日と四二年一月二十八日および四月五日の政令によってバルザックの作品を禁書処分にした。

（5）op.cit., tome 1, p.212.

（6）ibd. p.311.

（7）ibd. pp.430-431.

（8）ibid., tome 2, p.91

（9）ibid.

（10）この梗概は新たに筆を起こしたものであるが、先般執筆した「藤原書店バルザック『人間喜劇』セレクション別巻2、バルザック『人間喜劇』全作品あらすじ」の筆者担当部分と、どうしても類似せざるをえなかったことをおことわりしておく。また、次の『村の司祭』についても同様、再度論旨にしたがって物語を整理しなおし稿を起こしたが、やはり類似した記述が繰り返されてしまったことをお許しいただきた

い。

（１１）Le Médecin de campagne, *La Comédie humaine*, Pleiade tome 9, p.573
日本語訳は、ごくわずかの修正を除いて、東京創元社版バルザック全集、新庄嘉章、平岡篤頼訳に従った。以下、同作品からの引用は、すべて両者の訳に準じた。

（１２）La Messe de l'athée, Pléiade tome 3, p.399

（１３）ビアンションは『人間喜劇』における最高の医師で、デプランの愛弟子。『無神論者のミサ』の物語は、ビアンションが、常日頃、確たる思想信条として無神論を唱える師デプランの、サン・シュルピス教会に入ってミサを挙げる、という不思議な行動を目撃したことから始まっている。デプランとブルジャとのいきさつは、ビアンションが師にその矛盾の理由を尋ねたことから、明らかにされている。

（１４）op.cit. p.398

（１５）ibid. p.399

（１６）ibid.

（１７）ibid. p.400

（１８）ibid.

（１９）ibid.

（２０）ibid.

（２１）Louis Lambert, *La Comédie humaine*, Pléiade tome 11, p.653

（２２）op.cit. p.399

（２３）ibid.

（２４）このバルザックの哲学については、拙論「バルザックの小説様式についての一考察Ⅱ」（青山学院大学フ

ランス文学会、青山フランス文学論集復刊第一号、一九九二年）において詳しく論じた。したがって、ここでは展開を避け、必要最小限の要点を記すにとどめた。なお、根拠については、『ルイ・ランベール』の作品全体、ことにLouis Lambert, op.cit, pp.685-687を参照されたい。

（２５）バルザックは、自分の理想とする階級秩序の性格として、しばしば「家族」的でなければないことを述べている。そこでいう「家族」的とは、上と下の階級が敵対するのではなく、上層階級は下層階級を庇護し、下層階級は上層階級の精神的優位性を尊重するような姿である。『人間喜劇の総序』に、彼は次のように書いている。

「私は<個人>ではなく、<家族>こそが社会を構成する真の要素であると考えている。この点に関し、反動的精神の持ち主とみなされる危険をかえりみずに言えば、私は現代の改革者とともに歩むことはせず、逆にボスュエとボナルドと同じ立場をとる。」（Avant-propos de la Comedie Humaine, *La Comédie humaine*, Pléiade tome 1, p.13）

日本語訳は、ごくわずかの語句の修正をのぞいて、ユリイカ<特集、バルザックの世界>（青土社）、での石井晴一訳に従った。

（２６）op.cit. pp.509-510

（２７）ibid. p.510

（２８）op.cit., p.13

（２９）Traité de la vie élégante, *La Comédie humaine*, Pléiade tome 12, p.222

（３０）op.cit. pp.512-513

（３１）Catéchisme social, Œuvres complètes de Balzac, Conard tome 38, Œuvres diverses 3, p.694

（３２）バルザックの神の特異な性格については、拙論『無神論者のミサ』について―バルザックの宗教と政治思想―」（青山学院大学フランス文学会、青山フランス文学論集復刊第二号、一九九四年）において詳しく論じたので、ここでは重複を避ける。